



水氏子等も両派に分れ居りしが明治五年壬申八月栗野神社と改称す

境内神社(二社)
 入幡神社
 祭神 譽田別尊
 建物 間口一尺五寸
 由緒 不詳
 祭神 菅原道真
 建物 間口一尺五寸
 由緒 不詳
 祭神 菅原道真
 建物 間口一尺五寸
 由緒 不詳
 祭神 菅原道真
 建物 間口一尺五寸
 由緒 不詳

北野神社 (無格社)
 位置 大字口栗野
 祭神 菅原道真
 祭日 二月二十五日
 信託 三十戸
 社間 間口四尺三寸五分 奥行三尺七寸五分
 由緒 應仁年間創立に於ける祭日には餘興子供商売等ありて参拝者多敷なり 尚露店等も多く出て賑はし

栗野神社 (無格社)
 位置 大字口栗野
 祭神 菅原道真
 祭日 二月初午 二の午 三の午と称し之を行ふ
 社間 間口一尺三寸 奥行五尺三寸
 由緒 天保年間京都伏見稲荷の分祀なりと 其の地不詳なれども境内中上南園一丈六尺有餘の榎木あるを以て古より榎木稲荷と云ふ 凡そ八百年前の古木なりと

栗野神社 (無格社)
 位置 大字口栗野
 祭神 菅原道真
 祭日 延徳元年の創立
 社間 間口一尺八寸 奥行一尺五寸
 由緒 延徳元年の創立
 祭神 菅原道真
 祭日 旧曆正月十日 十月十日
 社間 寛政十三年三月十日創立
 由緒 間口一尺二寸 奥行一尺





(1) 日光本宮神社 (無格社)
 祭日 旧曆一月二十四日 七月二十四日
 由緒 不詳
 境内 二百二十五坪
 社間 間口一尺四寸 奥行二尺四寸
 位置 口栗野本社
 祭神 田心姫命 大己貴命、味耜高彥根命
 祭日 十月十七日 (近郷の子供に菓子と興へる)
 由緒 延長年間創立 本縣の臺帳に依れば日光神社とあり 明治四
 十一年十二月二十七日 日光本宮神社と訂正願 明治四十二
 年一月二十六日付許可さる
 社間 間口二尺六寸 奥行二尺
 (2) 雷電神社 (無格社)
 位置 口栗野新宮山
 祭神 鳴電命
 祭日 不詳
 由緒 不詳
 社間 間口一尺 奥行八寸

(1) 入坂神社 (無格社)
 位置 口栗野日渡路松木
 祭神 素戔嗚命
 祭日 六月十五日
 由緒 山林六段五畝二十三歩
 元鹿島神社の社殿たりしが明治五年八月鹿島神社を村内日
 光神社へ合併するに及び境内にありし入坂神社を遷座したり
 宮殿は層應元年栗野城主平野新監の創立にかへり 後文明十
 八年十二月同城主平野龍久の再建すると云ふなり
 社間 間口一間五尺 奥行五尺三寸
 境内 二百五十坪
 (2) 日光龍尾神社 (無格社)
 位置 大字口栗野山王
 祭神 田心姫命 大己貴命 味耜高彥根命
 祭日 旧曆九月九日
 由緒 延長年間創立
 社間 間口三尺 奥行二尺五寸
 位置 愛宕神社 (無格社)
 祭神 大字口栗野山王
 祭日 大軒過突智命





(9) 愛宕神社 (無格社)
 位置 口栗野横町 城裏山
 祭神 大彦彦火神
 祭日 旧曆正月二十四日 六月二十四日
 由緒 曆應年間の創立にかゝる 社殿のあるところ高燥浄潔にして
 展望極めて可なり
 社間 間口一尺四寸 奥行二尺四寸

(10) 田原神社 (無格社)
 位置 口栗野桑澤
 祭神 足利又太郎 藤原忠細
 祭日 旧曆正月二十日 一月二十五日 四月十一日 十月十七日
 由緒 山林一町二反五畝五歩 現金百七十八円八十一銭
 財産 田五反一畝三歩 口碑に往古忠細胡麻畠の中に
 寛治元年勸請すと云ふ 今なほ氏子等胡麻を作らず
 戦死せりと云ふ
 社間 間口三尺 奥行二尺三寸

(11) 三峰神社 (無格社)
 位置 中栗野字三峰
 祭神 高御彦彙日命 天御中主命 神御彦彙日命
 祭日 毎月十九日

(12) 福荷神社 (無格社)
 位置 中栗野板名
 祭神 福荷魂命
 祭日 旧曆二月初午の日 二の午の日
 由緒 明治十二年二月再建
 境内 六十五坪九合
 社間 間口二間 奥行二間半

(13) 三ヶ月神社 (無格社)
 位置 口栗野日渡路
 祭神 月讀命
 祭日 正月三日
 由緒 不詳
 境内 五十六坪
 社間 間口一尺二寸 奥行一尺六寸

(14) 三峰神社 (無格社)
 位置 中栗野字三峰
 祭神 高御彦彙日命 天御中主命 神御彦彙日命
 祭日 毎月十九日

(15) 福荷神社 (無格社)
 位置 中栗野板名
 祭神 福荷魂命
 祭日 旧曆二月初午の日 二の午の日
 由緒 明治十二年二月再建
 境内 六十五坪九合
 社間 間口二間 奥行二間半

(16) 三ヶ月神社 (無格社)
 位置 口栗野日渡路
 祭神 月讀命
 祭日 正月三日
 由緒 不詳
 境内 五十六坪
 社間 間口一尺二寸 奥行一尺六寸





(ウ) 日光神 (社) 大字中栗野大栗 (村社)
 祭日 大己貴命 田心姫命 味耜高彥根命
 四月十五日 田一交(敷二十四歩) 山林一畝歩 神木四十五本
 境内 一及五畝七歩
 氏子 間口三間 奥行二間半
 社間 弘仁二年の勸請 空曆十三年五月再建 現今の堂宇即ち是なり
 境内に巖島神社 山神社 稻荷神社 千別神社等の諸社あり
 祭日には小學児童の参拝あり 氏子總出にて相當賑かなり

(リ) 山神 (社) 大字中栗野大栗 (村社)
 祭日 大山衞命 一月二十五日
 社間 山林十五町七反歩
 境内 間口二尺一寸 奥行二尺九寸
 人皇第十代崇神天皇の皇子豊城入彦命當地に流罪に處せられ
 當社境内に居住し給ひし時當社水神社を勸請し給ふ 爾後康平
 四年源義家奥州追討下向の時本社へ祈願して勝利を得たるを以
 つて凱旋の際太刀一口鏡一面具足一領進獻せりといふ
 村落が山岳部にある所では山の神を祭つた所が多い 随つて大山
 衞命とか木花咲耶姫などが多く 而して此水等山の神が源始
 宗教と結びつくとき他の女神と夫婦の關係を以つて示現す
 るこの場合主として男神の形となるが 單柱山の神と認め
 られるときは女神として男神の形となるが 單柱山の神と認め
 て崇敬されてゐるものなれば安産の神 又は農事神として

(イ) 日光神 (社) 大字中栗野大栗 (村社)
 祭日 大己貴命 田心姫命 味耜高彥根命
 四月十五日 田一交(敷二十四歩) 山林一畝歩 神木四十五本
 境内 一及五畝七歩
 氏子 間口三間 奥行二間半
 社間 弘仁二年の勸請 空曆十三年五月再建 現今の堂宇即ち是なり
 境内に巖島神社 山神社 稻荷神社 千別神社等の諸社あり
 祭日には小學児童の参拝あり 氏子總出にて相當賑かなり

(ロ) 日光神 (社) 大字中栗野大栗 (村社)
 祭日 大己貴命 田心姫命 味耜高彥根命
 四月十五日 田一交(敷二十四歩) 山林一畝歩 神木四十五本
 境内 一及五畝七歩
 氏子 間口三間 奥行二間半
 社間 弘仁二年の勸請 空曆十三年五月再建 現今の堂宇即ち是なり
 境内に巖島神社 山神社 稻荷神社 千別神社等の諸社あり
 祭日には小學児童の参拝あり 氏子總出にて相當賑かなり

明和五年三月建立 大正四年十一月改築





(イ) 道陸神社 (無格社)

(ロ) 波奈能登夜神社 (無格社)
 在置 大字入栗野波奈能登山
 祭神 伊邪那岐命 伊邪那美命
 境内 坪数三百坪
 氏子 九十三戸
 社間 間口一尺 奥行二尺
 由緒 不詳

(ハ) 浅間神社 (無格社)
 在置 中栗野大栗
 祭神 木花咲夜姫命
 祭日 四月十八日
 境内 坪数四十二坪
 信徒 三十二戸

由緒 宝治元年勸請すと云ふ 口碑に曰く 往昔忠細 胡麻島の畦にて 戦死せりと故を以て 父子今に及んで 胡麻を忌で栽培せず 境内に天満宮神社 巖島神社 稲荷神社 等の社あり。

(ニ) 田原神社 (無格社)
 在置 大字中栗野菅沼
 祭神 足利又太郎 藤原忠綱
 祭日 旧三月十五日
 積立金七百円
 境内 坪数大石八十五坪
 氏子 六十四戸
 社間 奥行二間半 間口二間半
 惟神教會校社 間口六間 奥行三間半

(ホ) 菅光神社 (無格社)
 在置 大字入栗野管内
 祭神 大己貴命 田心姫命
 祭日 十月十五日
 境内 山林七畝三十八歩
 坪数七畝七歩
 氏子 八十戸
 社間 間口四間半 奥行二間
 由緒 不詳
 宝永五年甲申年再建したりと云ふ

建物間数 間口二尺 奥行二尺八寸
 不詳
 境内に雷電社祭神(建雷命)あり。





(7) 鍵金不動
 所在地 大字入栗野五月
 祭日 旧正月二十八日
 傳説 今を去ること三十五年前大風雨ありそのために栗野川は大洪水とな

(8) 熊野神社 (無格社)
 位置 大字入栗野五月
 祭神 伊弉那岐命
 境内 坪数四畝二十四歩
 社間 氏子 十二戸
 由緒 不詳

(9) 雲見神社 (無格社)
 位置 大字中栗野三貫内
 祭神 行波長姫命
 境内 坪数三十坪
 社間 間口一尺七寸
 由緒 奥行二尺五寸
 不詳

(10) 久那斗命
 位置 大字中栗野道陸神
 境内 坪数二十六坪
 氏子 四戸
 社間 間口三尺
 由緒 奥行三尺
 明治三年八月再建

本不動尊は元現在の河野重太氏家の守護尊也所有をりしが明治
 十年追地の大火に難をまぬかれてより追地坪の不動尊をせしと
 以前は追地港の沢山林入口に存置せしが考詣其の他の不便により
 天保の頃現地に移轉せしものなりと
 尊体は元妙見寺より迎かへしもの、又妙見寺にては皆川城主より
 賜はりたるもの、説あり、明治十年の大火には難をまぬかれたるも
 明治十二年三月十九日乞食のため大火を起し、ために焼失し現
 在のもの其の後の建立なり。

(11) 滝山不動堂
 所在地 大字中栗野追地
 祭日 旧正月二十八日
 境内 坪数二十一坪
 社間 間口一間半
 由緒 奥行一間半

(12) 信徒教
 社間 間口一間半
 由緒 奥行一間半

り永い間物運き音をたてて居った。其の際不動尊体のある所の深い不
 動ヶ淵は一夜の中に埋まらしてしまつたといふ其の頃は此の不動様は非
 常に参拝者多く塞銭も多かりし故或人が塞銭箱を備へた
 と云ふがそれを一夜の中に流してしまつた。其後不動様の近くに
 物を供へると怒つて水が出る。それかう誰言ふともなく物よりひな
 不動様となり、遂に決して供へない様になつた。爲めに今日に至る
 も晴天續きの時は里人来て雨を乞ふ様になつた。





2 寺院

(1) 妙見寺
 宗名 曹洞宗通妙派小本寺
 本尊 釋迦牟尼如來
 寺格 法幢也
 現住職 武田良英
 由緒 堂陰國貞慶那下妻形中本寺多寶院末にして享保五年十月四日の夜大火災にかゝり殿堂悉く焼失して開基沿革等詳な
 らず

寺領 宅地 三七三坪
 畑地 七畝十一歩
 境内坪数 二二大七坪
 堂間敷 間口七間三尺
 信徒總代 福田米平 戸長 福田直三郎
 信徒 三百戸
 奥行七間

田池 三町八段四畝七歩
 雑地林 十四町二段一畝九歩

境内佛堂一宇
 本尊 千手觀音十一面觀音 馬頭觀音 準胝觀音
 聖觀音 間口三間三尺 奥行二間

(2) 地藏堂
 位置 大字中栗野板名
 境内 坪数三十坪
 信徒數 三十三人
 由緒 不詳 明治十年四月十一日焼失

(3) 十一王堂
 位置 大字中栗野板名
 境内 坪数二十四坪
 由緒 不詳 明治十年四月十一日焼失

(4) 大日堂
 位置 大字中栗野追地
 祭日 旧三月十五日 新七月(年々日定也)
 境内 坪数十六坪
 建物間敷 間口奥行各二間
 由緒 明治十年四月十一日追地の大火の際焼失し其の後建てたる堂なり
 追地附近の大麻の良好なるは大日様のお蔭であると言つてゐる。





(ハ) 清滝寺 口栗野字桑澤
 宗名 新義真言宗豊山派
 本尊 不動明王
 由緒 延寶四年の創立にして開基は惠秀法印なりと
 社 社の別當として口栗野の祈願寺たりし所なり 故に新宮山
 千寺院光明寺と称し除地林を有したりしを見ても一時盛
 んなりしことを知る 明治維新の際除地林は上地を命ぜり水明
 治十九年一月二十五日横町よりの失火にて不幸類焼し記録
 大半焼失せり現今の堂宇は其の後の建物なり
 下野國上都賀郡下粕尾村小本寺自覚院米なり
 寺領 田池 四反六畝二十四歩 畑地 四反五畝三十歩
 雑地 三町七畝五歩 宅地 四四大坪
 境内坪数 二七八坪
 本堂間敷 間口奥行共二間
 鐘樓間敷 二間半 四方
 檀徒 七十三戸
 明治十二年九月
 住職 多木泰順
 信後總代 戸坂米四郎
 戸長 横尾勝右工門
 明治十七年
 住職 多木泰順
 總代 齋藤勝吉
 戸長 横尾勝右工門

境内に稲荷神社 旧曆二月初午二の午 祭日
 延生地藏尊 旧曆三月二十九日 祭日
 成田不動尊 毎月二十八日 祭日
 特に正月、五月、九月は護摩手を焚く
 五月は農家の忙事のため七月行也
 依者 四十戸

檀間敷 七十六戸
 堂間敷 四町二反三畝十九歩
 雑地 四町二反三畝十九歩
 間口二間半 奥行二間半
 田池 二反四畝二十二歩
 雑地 二反四畝二十二歩
 鴉飼堯雅 畑 一反六畝七歩
 田池 二反四畝二十二歩
 雑地 二反四畝二十二歩
 間口二間半 奥行二間半
 七十六戸
 古来数々天厄にかかり書誌の多くは焼失し或は散失してある
 上に近くは明治十九年の冬類焼の難を受けて堂宇は勿論什器
 諸品に至るまで悉く失ったために現在では由緒沿革を知り得
 る材料は殆んど絶無といふ有様で遺憾至極ではあるが到底





第五章 兵事
陸軍

種別	部		階級	現役	豫備役	後備役	補充兵
	計	別					
兵種	歩兵	將	1	1	2	4	6
		下士	1	1	2	4	6
騎兵	將	1	1	2	4	6	
	下士	1	1	2	4	6	
砲兵	將	1	1	2	4	6	
	下士	1	1	2	4	6	
工兵	將	1	1	2	4	6	
	下士	1	1	2	4	6	
輜重兵	將	1	1	2	4	6	
	下士	1	1	2	4	6	
憲兵	將	1	1	2	4	6	
	下士	1	1	2	4	6	
航空兵	將	1	1	2	4	6	
	下士	1	1	2	4	6	
衛生部	將	1	1	2	4	6	
	下士	1	1	2	4	6	
獣醫部	將	1	1	2	4	6	
	下士	1	1	2	4	6	
軍樂部	將	1	1	2	4	6	
	下士	1	1	2	4	6	
經理部	將	1	1	2	4	6	
	下士	1	1	2	4	6	
計	計	1	1	2	4	6	
	計	1	1	2	4	6	

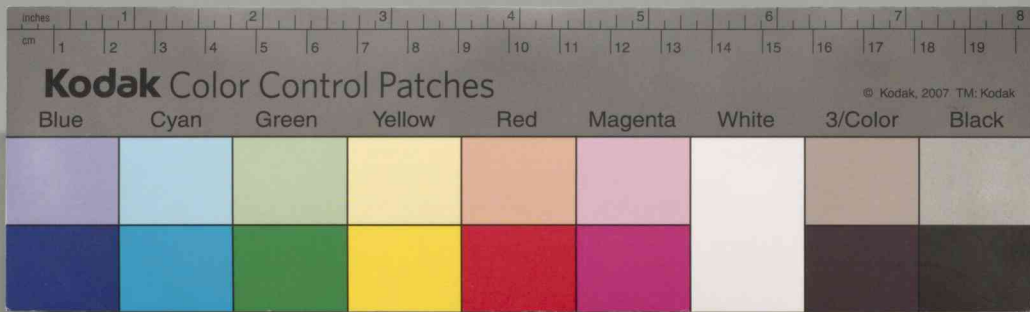
精確なるものを作る事は出来ないものである。そこで今は唯
僅かに知り得た所や口碑に残る所を綜合し推考して沿革とす。
無論多少の独断私見の誤りはあらうが然し其れは現在の所正
を得ない。他日材料を發見して誤りを正すことにする(現
任職)
位置 叶山三明院清滝寺はもと叶台山にあつたのであるが獨
々寺運衰狀に傾ける時火災にかはりしを機として檀徒の篤徒
の篤信家某氏が寺門の復興をはかり土地を寄附し現位置
に移転したものと傳へてゐる。其の位置年代は確と判らな
い。
現在の位置は栗野町大字口栗野叶である。



海軍志願			壯丁學力			壯丁體格		
昭和七年	昭和六年	昭和五年	昭和七年	昭和六年	昭和五年	昭和七年	昭和六年	昭和五年
七	六	五	三	四	一	一	二	一
一	〇	〇	三	三	二	一	七	〇
一	〇	〇	二	一	一	一	二	二
一	〇	〇	五	九	二	五	三	三
一	〇	〇	六	六	五	六	六	五
一	〇	〇	六	五	六	六	五	六
一	〇	〇	六	五	六	六	五	六

(4) 壯丁檢查成績

(3) 戰病死者		(2) 海軍	
計	別	種	階級
三	一	水	將校
四	一	兵	下士
一	一	機	兵卒
六	二	機	將校
一	一	關	下士
一	一	兵	兵卒
一	一	航	將校
一	一	空	下士
一	一	兵	兵卒
一	一	軍	將校
一	一	樂	下士
一	一	兵	兵卒
二	一	計	計



第六章 沿革

各時代史
 上古より奈良時代に至るまでは文献遺蹟等發見されぬ故如何なる状態にありしか知る能はず
 然れども三代實錄に依りて平安時代の初期元慶二年九月十六日人皇第五十七代陽成天皇の御時勅授下野國賀蘇山神社從五位下云々等より見れば今より元慶二年近算ふれば十三十七年の昔にあり然れども此以前に於て祭神たる武甕槌命月讀命天沼中主命早くこの地に渡り給ひしこと推察する故にこの地は大和奈良時代より開けしならん
 又平安時代に於て弘法大師の行脚もありたること各寺院の番頭よりして推察し得る同時代に於て勝道上人出流山より我が横根山を越えて日光に向はせられたることより見ても政治的或は文化的に古代より發達したものと思ふに充介の證を見らる
 神社の由緒等より見ればこの地は平安時代の末期即ち保元平治の頃に至り天下麻の如く乱れ世は修羅の巻と化したる餘波を受けてこの地もほとんど荒廢せることを知るその後吉野時代曆應元年平野範久城を築きて領す今の口栗野城山元龜三年其の後嵐平野大膳久國に至り佐野修理介宗綱に降る於是佐野氏の領するところとなり城代七將を置き之を管す
 後天正十六年二月山城守皆川某と隙あり戦ひ破れ皆川氏に領せらる越





えて十八年皆川氏七
 三河守結城某之を領す慶長六年五月結城氏居を越前國敦賀に遷すや代つ
 て主計頭某之を領せり同十七年正月始めて口栗野入栗野とに區分するや
 幕府の代官所となり大河内金兵衛小林重左衛門の二人口栗野を管じ入栗
 野は大河内金兵衛独り之を管す
 寛永十年六月本村の中央をさき中栗野村を生かや旗本高山平左衛門の知
 行所となる而して口栗野は旗本平賀小三郎春日八郎右衛門津田八郎左衛
 門の知行所に入栗野は旗本本間重左衛門の知行所となれり
 承応年間口栗野は備中守阿部某分麾下親左兵衛知行所代官全部孫五衛門
 の管轄する所となり其の後對馬守阿部某の領する所となる後代官竹村惣
 左衛門市川孫右衛門の管轄となる元禄十一年八月六日大給となる
 曰く河内守中條栗水野帯刀打越左太夫小坂為太郎伊沢助三郎加藤三左衛
 門の知行所となる次で徳川氏の亡ぶるや明治元年右橋役所の所轄となり同
 二年日光縣の所轄となる越えて五年橋本縣の置かるに及び之が管轄に
 歸せり
 大字橋本は初め皆川氏の所領たり天正十八年四月八日皆川氏亡びて徳川
 氏に歸せりその後正徳年間幕府旗本の士土岐大學頭の地行所となる明治
 元年王政復古の制出でて土岐氏土地土地を命せられ日光縣管轄となり同五
 年橋本縣管轄となる
 以上の沿革より眺むれば本町は古くより政治的に文化的に相當の発達を

2
 人物
 横尾宜智
 享和元年四月十七日を以つて口栗野に生る素封家を以つて聞えたる横尾
 象の出たり天資穎悟夙に鳳雛麒麟兒とし了嚙目せらる梢長じて學を好み
 師を聘して之に師事すること多年學業大いに進み徹宵手に書卷を釋くす
 諸子百家通ぜざるなかりきと晩年畫を椿山に學び友山と号す碎鏡數年技
 術に入り優に大家の疊を牽し神韻高島楯墨の間に躍如たりと言ふ出殊に
 然るに所以か而して貨殖の術に精しく横尾家が陶朱の富に致し方代不易
 之礎を固ふせる氏の力與つて多きに居ると言ふ明治十年病歿了致す享
 和八十一年才なり
 横尾勝右工門

遠くつ、現在の栗野町をつくりしならん栃木縣管轄となりたる際横尾勝
 右工門氏副戸長を命ぜらる
 明治二十二年町制を施行し横尾勝右工門氏村長となる
 明治二十五年八月福田安彦氏二十七年神山太郎氏村長となる
 明治三十九年町制施行す水神山太郎氏村長となる
 大正二年横尾宜弘氏八年福田富士氏村長となる
 福田氏十三年九月再任昭和元年十二月辞職二年六月三度町長となり四年
 一月辞職す助役安發清作氏町長代理として事務を處理し居りしが六年一
 月町長に選舉さる





而して機略縦横の雄才は常に勝を敵に制せざるなし圖轉無碑の快腕を揮
 ぶ縣政に參與すること三十年になん／＼と企圖畫策するところ故擧に
 違からず現下本縣に於て政界の隨一人として推稱せらるゝ眞に所収ある
 か余而して氏は意志及び体力強健なること鋼鉄の如く益進主義の權化と
 うたはれつゝありその理財に造詣深き處に於て將に博識雄辯なる處に於
 て早稲田走伯に酷しむるものなしとせざれば再が衆議院議員に當選し功
 を以つて勲四等に叙せらる大正八年五月二十一日病歿せり

福田安彦

弘化四年十一月十七日入粟野に生る家世々農を業とす性沈毅にして大度
 あり喜怒哀色に表さず宛然若武士の風あり豊類にして面貌黝幼より劍戟
 を好み頗る堪能の聞元高く筆亦拙からず常に山野を跋涉し身膽を鍊し精
 蘊の間に走るも未だ曾て脚履草鞋を着けたることなく三伏の炎天笠をた
 に被らず赤裸々として平然たり裸形人とも斯くやと思はばかり見るとの
 驚嘆せざるを客あるは喜びて之を迎へ史を論じ文を談じ倦むことを知
 りず其の高風一帯の景迎する所なり

神山太郎

大正二年三月十日大守相本に生る五右衛門の長男なり豪農を以つて聞少
 る為人飯糶物に拘はらざるの風あり而かも放膽なる如くして事々物々同
 匠の注意怠らず弱冠にして村治にたりたり町長の任置につまじしことあ
 り二十余年の公的生涯に於ける鍛鍊を経て殆ど自得の妙域に達し光彩真

嘉永三年八月二十七日を以つて鹿沼町に呱呱の聲をあげ富豪大谷儀兵衛
 氏の長男なり養はれ横尾宜智の嗣子となる明治五年以降戸長或は村長
 に推されること前後十回以つてその非凡なるを想見すべし

為に沖澹酒脱曾て名利を求めず識見群を抜き頗る潔癖あり書道に精進し
 二公管を揮ひば墨痕淋漓として天馬空を往くの概あり風采清癯鶴の如
 く雲野鶴を侶侶とす毎に鞞の下の家居し俗塵をさけて専ら吟嘯を事
 すと所謂大隱は市に隱るゝの乎而して詩趣饒かなる春の晨秋の夕歸り
 政園の山河に逍遙して歸去来を歌ふ門地高く巨万の富を擁し優遊自適
 人生の快適事たるを矢はず可羨哉

横尾輝吉

安政二年五月四日を以つて鹿沼町に生る本姓角田氏初め壽一郎と稱す明
 治七年姻戚の間柄なる口栗野横尾家の養子となり養父の名を襲ひて輝吉
 と改む幼にして聰慧潤達棟梁の材を以つて目せらる年甫めて十九感ずる
 所ありほん然學に志し倚て大隈伯矢野龍溪等の諸名子と交る明治十七年
 學成つて郷にかへるや直ちに村會議員にあがり此銳意村治の改良を計り
 治と寝食を忘るゝに至る十七年選ばれ縣會議員となるや所論克く肯綮
 に中り快辯四建を歴するの概あり縣民擧つてその材幹を稱す三十五年衆
 議院議員にあがりたる時恰も議會と政府との衝突に際し解散の不幸にあえ
 ぬ

氏は縣會議員の選挙の執行するゝ毎に候補者として打つて出でざるなく





3 城跡

口栗野字城山に在り、曆應年間平野範之の築く所となり、城山といふは町の中央部より北に折れて山に通ずるの道あり、道窮る所即ち是にして山は東西にのび更に南北に羽翼を張るに似て、圍字形をなす、其の頂に至れば扁平にして、舞臺の三重脚を見るが如き、階段隨所あり、城郭の跡として、何人も信ぜざる能はざるべく、其の向つて左端なるを俗に男二城と呼び、右端に今赭褐色の粘土を宿せる所を女二城と稱す、この北に面せる一角は右を疊て、牆壁を築けるもの、如く急轉直下屏風をたてたるに似たり、城郭としての形骸は茲に多くを存せるものと思惟す、栗野川はその麓を一つ、人ぞ流氷粗尾川はその南清洲山麓を流れて、遂に兩川相合す、首尾山を以つて、或は拒し河を以つて、或は燕る、而して部分的な倉桑の變なきに非ざるも、其の大体に於て昔時と大差なしと想像し得べく、人ば地勢上要害堅固なりしは争ふべからず

別項落傳説を生む偶然ならざるを知る、吉田博士の大日本地名辭書には、東國擾亂記下野國誌を引きて左の如く記せり曰く

天正十二年七月、皆川廣照の將齋藤隆兵二千を率ひ、口栗野に入り、急に栗野城を攻む、この時栗野城は佐野宗綱の城なり、水は其の將平野大膳、久國防戦ひ、兩軍死傷多く、皆川方にては、大將秀隆を初めとして十三人の將士討死し、佐野方にては、久國初め三十七人の討死あり、城は遂に皆川氏にうばはれ、後この城山は横尾勝右衛門の所有となり、多大の費用を投じて園

にさん然たるものあり、さきに内務省に於て模範町村に推奨せられたる故無きにあらずるなり

而して、氏は理財に長じ、公其心に厚く、銳意町治の改善に努めつゝ、あり、躬幹長大一たび相見ても、未だ語を發せざるに、蚤く已に其の威嚴に壓せらるゝの、思存き能はす、野藏山白に媚ぶの類乎、資産豊饒、門地亦尊し、からず、人の師表たるべき資格を備えたり、大正二年八月十二日病歿す、年五十五才なり

中枝武雄

豪農として知らるる常に農事の改良に盡力せり

明治十六年以降、英進會博覽會等に農産物を出品し、賞状を受くること前後二十回に及べり、明治三十二年大森播種器を發明し、大日本農會總裁彰仁親王殿下より、綵白授有功章を受けたり





の娘に千束といふ水も今年十九の春を迎えたばかりの美人があつたことの外心情がうるはしく絶世の佳人であつた思ひの文を細々とかき認めて左近が詩に送つたがその文末に

君恋ふる涙に袖のしがりみは朽る詩りに身をひなすかな

わが袖の露にやとりもなまじ日にもかくばかりました恋ふものかな

性に目醒めた天橋左近何條以つて黙すべきか返書を認めその終りに

誠わ水を應ふる深の川ならは身をしがらみによせよとせよとせよとせよと

我もとくあもに迷ふや浮雲の晴水も今宵はあが月を見る

こゝに兩人は天正十六年十二月二十日を選んていよく黄道吉日を定むることになつた

皆川義照は天正十六年十一月いよく栗野城を攻めることになつた

河内守張卷伊勢守の兩人を大將として軍奉行には寶田圖音北島藏人寺崎

平右衛門片柳平内太郎大関助四郎関根六郎四郎浦野新太郎大島新右衛門

平塚新七郎安塚宮内野頼玄蕃稲葉大郎左衛門源助三郎五郎五郎左衛門

増山五右衛門等の勇士を始めとして總勢二千余騎

栗野の城代はも急使を以つてこの由を佐野へ注進に及んてから加勢とし

て田中源三郎菊地源大軍七四郎左衛門上山修理三木小四郎内田與三郎大

野與左衛門黒川禮次大藤附九郎左衛門関塚彌助等の衆徒の面々軍大將と

しては幸内信濃守生澤伊豆守總勢一千五百余騎城代もちも嚴重に栗野

城を守護することになつた

4史跡
風に直し横尾家没落後町有となり公園となす

皆川戦記に表はれた栗野城

天正九年辛巳極月佐野家の相續として北條氏綱の二男氏忠を迎へることになつたがこれ頗る反人間性にとんだ男で恩顧の旧臣さへ暇を乞ふ者が澤山にあつた當時皆川家にあつたは北條家と戦端をひらいて居る最中であつたのを奇貨とし氏忠は栗野の城代等以下知して皆川家の境領を奪掠しやうと企て平野大膳岩出左京崎雅樂神山新右衛門等をして各分擔せしめて尻内梅沢鍋山久野深程等の郷番をあひちらし境界の定抗を植替へたりして無法の所爲を至らざる言ふ有様であつた此水は天正十一年八月中旬のことであつたが同十八日の早朝この由を皆川方に報告された廣照は冷度この時草倉合戦の最中であつたがさすがは名將に恥ぢず少しも動ずる気色もなく静かに天野中務を呼んで三百余騎を與へ栗野勢に對抗せしむることになつた

城士の身は今日の太平も明日は劍の下に霧と消ゆる習を常として士道を尊び實に朝日に香ふ山櫻の色香を含んで居つた

天正十五年栗野城は佐野の旧臣四五人を選んで城代となし頗る嚴重に守らせて居つたがその中に一人大橋左近といふ若者があつた今年二十三才佐野家中第一の美少年であつた上大藝の嗜みも深かつた同勤の平野大膳





皆川の戦陣六百騎陣鐘陣大鼓を打鳴らしておし寄せ飛道具を以て攻
 めたて栗野城にても鉄砲を雨霰とうち出す先方は鉄砲をうち捨て
 短兵急に切り入るやこちらでも應戦したのでいさゝか引足となつた
 らでは勝利のつて切り立てた一町余も追撃した若しも伏兵があ
 ったとは警戒すると先方はまたもや押し寄せ互にみ合ふ中に皆川の
 陣は左右にまはり裏を断ち切つて栗野方を押し一、二三方より太刀
 どく合撃した膝附援守雅樂與三郎國分縫之助を楯置物山井兵庫を
 として勇士十五騎討死したこの体を見たる寺内信濃守生沢伊豆守馬
 にまたがり大音あげて真先にすゝむつぱり松崎雅樂神山新右衛門大橋
 左近横尾兵庫平野大膳もろとも城兵七百余騎各々に武器を携へて地煙た
 てい真一太字に打つてかゝる
 皆川方の狩野小傳次郎は寺内信濃守諏訪山田幡守は大橋左近水谷玄蕃は
 松崎雅樂と渡り合ふ互に殺衝をつくして虚々實々皆川方は遂に三人とも
 討取られた
 この水を見るより板橋治助九里帯刀同甚三郎鈴木新居宗彌金子長谷川
 等太刀引きぬいて切つてかゝる遂に大橋左近は板橋治助に寺内信濃守は
 新井宗彌に切りぬせられ松崎雅樂と九里帯刀は後すつ流しつ戦ふうち
 九里が太刀鋸際より折れたるを松崎待三郎と槍をしまし胸中めかけてつ
 き出すを鈴木源七横合よりおどりがかりつて槍をバツサリ切り落す松崎は
 馬上ながらムズとくみつきそのまゝ、馬の間にころむ落ちて双方とも
 偶刺して死んだ栗野軍は神山新左衛門平野大膳横尾兵庫等重駄天の如く
 に暴れ立つと皆川軍の中より植竹左馬介は横尾兵庫に平野大膳は高田兵
 部につきとめられ齋藤右京は遂に神山新左衛門が槍先にかゝつて討死し
 る水より兩軍麻の如く入り乱れ暫くは火花を散らしてゐたその時皆川
 方の後陣の者ども城廓間近に押しよせ來つて城中へ數多の火矢を射込ん
 だので所々より火を發し皆散々に落ちて行つた哀れや鉄壁にひとしきわ
 が栗野城に今は焰天をこがさんばかりの猛火につゝま水間もなく一片の
 焦土と化し去つたのである
 天正十六年十二月十七日のたそがれ全く皆川軍の占領するところとなつ
 た皆川ではこゝに陣屋をつくり在番のもの置置して嚴重に守らせ定抗を
 立替へて領地を定め年來のうつ憤を晴らして凱旋することゝなつた
 一時は白晝といへども人々の往來絶ゆる程の淋しさ誰いふとなく栗野の
 城跡には毎夜深更一人の美しい少女あらはれ血に染つた水たまりの死
 人の體に口をつけてその血を吸ふといふ風説が起つた
 さてこの怪物こそは栗野城代平野大膳の娘千束なることがあとになつて
 わかつた親大膳の討死二世を契つた大橋左近も戦場の露ときえうせ身も
 世もあらぬ悲しさからせめて今生の名残りに今一度愛人の死首なりと見
 た上で自害しやうといふ考へからであつたが至誠は遂に天にも通じけり
 左近が死首をさがしあつて、ヒシヒシとばがりにとりつきて前後生体なく泣
 きくづれて居つたがその時皆川陣の見廻りの者これを見て巨細をきき、左





慶應元年閏五月に入つては毎日毎夜雨天續きて農作の方ではかとりず困
 った居つたものであるから同二十九日は村方一同早朝より辨當持參で天
 氣祭りをなし神酒を相當いたがいて機嫌よく歸途についたのであるが同
 夕刻菅沼坪の方より悪党八人があり、異様な風體をして嶋屋へ泊りこ
 んだものであるから忽ち村の評判になつて鉄砲その他持物持參で至急出
 向するやうにと坪中へ水はまり日渡路方面までのこらざ通知があつた
 ものであるから夕飯時より真夜中にかけて警固の人々火事場頭中にとび
 口持參といふ甲斐々々しき出でたちまづ嶋屋上下の往來へは大籠をなら

場所 慶應元年閏五月に入つては毎日毎夜雨天續きて農作の方ではかとりず困
 った居つたものであるから同二十九日は村方一同早朝より辨當持參で天
 氣祭りをなし神酒を相當いたがいて機嫌よく歸途についたのであるが同
 夕刻菅沼坪の方より悪党八人があり、異様な風體をして嶋屋へ泊りこ
 んだものであるから忽ち村の評判になつて鉄砲その他持物持參で至急出
 向するやうにと坪中へ水はまり日渡路方面までのこらざ通知があつた
 ものであるから夕飯時より真夜中にかけて警固の人々火事場頭中にとび
 口持參といふ甲斐々々しき出でたちまづ嶋屋上下の往來へは大籠をなら

怪我人 半右衛門 伴岩藏 自宅に引取死去
 織之助 自宅にて療治中死去
 五右衛門 徳兵衛 その他 非番人
 中栗野村 嶋屋定右衛門 宅

右八名の一行にてその前日粕尾村にて別れし者左の二名
 下總國海上郡 堀村無宿友藏 二十七才召捕
 奥州岩磐郡 大黒村無宿 浅吉 二十八才 擲捕
 當州 牛員市 五郎
 水戸領 大越村 劍術修業 丈八
 越後國 浦沢 常五郎 乾分無宿 龜五郎

有名なる嶋屋騒動
 時期 慶應元年閏五月二十九日
 悪党 御代官前市川孫右衛門 御支配 甲州 鷓野郡 鯉沢村 無宿 新吉 二十五才
 召死
 當國 小野寺村 出生 當時越後國 住居 無宿 玉吉 三十四才 召死
 御代官 前奥州 今井 塚村 無宿 次郎 召死
 當國 生井村 嘉七 乾分無宿 留三郎 二十七才
 奥州 柴吉 事無宿 松吉 二十七才 即死

流石に百九十六年閏榮元に榮えし皆川城も天正十八年四月八日遂に落城
 した

ださんとしたが千束は一言の答もなく俄然正敷る懐剣をぬぎ放つてえん
 頭につきたて間もなく息を絶つた
 天正十七年十一月 関白秀吉公より北條氏直討の命が下つたに
 當り早速関東の諸城主に援助を求めた皆川義照は平素信ずる石裂の
 代參をさし立てて武運の長久を祈つたが廣照はその夜不思議なる夢を見
 皆川の城と小田原の城とが同じ岩の上になつてあつたがその岩が二箇に
 裂けて城は左右にて人ぶくすると中央に廣大なる城が残つて盛に煙を立
 ちのぼつてゐるところだつた





怪我人中尤も天晴水なる働きをなし永く後人の亀鑑となつた大塚岩藏氏
 の法名及び碑文は左の如きものである
 真觀院即心居士
 真觀諱義直緝岩藏大塚半左衛門義玄嫡男也同村妻若出次女有一男一女義
 直自幼事我甚敬常淨劍第一刀流之旨旁遊乎風流然天性豪強不禁今茲屢應
 元夏閏五月晦我村會有強盜輒以命發農卒圍之義直挺身善當立斃數人重傷
 終死因賜賞者也嘗臨没囑言其之子不卒天壽以此嗟行塵三十有七近郷為
 哀愍於是榆木其他二十有九村長會議憫義直死事刻碑以昭後遂舉出磨勸命
 建之云々
 義直諱正
 人の為賊打はたすな身こそなにあしからぬ露の命を
 出流實記に表はれたる栗野地方
 イ栗野横尾へ押借入ること
 口栗野村に横尾勝右衛門と云ふ豪家があつた表見世は呉服木物荒物一
 切を商ひ大いに繁昌して居つたがその外に金貨寶屋などまで営み居宅
 は代々農業を勵み家内大勢の暮しであつたが當卯慶應三年十二月五日
 の夜何者とも知れず大越路川端峯吉庄左衛門兩人宅へ押し込み斧さし
 出すべき旨申傳へ彼の廣及の斧を持參して下方へ五三人連に罷越し
 たが間もなくその夜栗野横尾家へ関東御取締出役渋谷鷺太郎罷越した

べ中には大石を入れて棒を通し横木束を澤山に用意して今かノノとまぢ
 居る中早や夜も白んで来たが人影はまだはつきりせざるところ織之助先
 だちにて常之助浅之助の三名何者なるや面會の上事を決せんとして立ち入
 りたるに直ちにきりつけられ耳より肩へ真一文半血煙バツと立ちた水は
 表雨戸一枚明け放ち五厘玉の鉄砲をうちこみたるに表には大勢のものと
 も式装いかめしく控へ居るにつけ二階より火鉢煙草盆その他品々を投げ
 出し續いて悪党八人きり出て来た水はこゝに暫く阿修羅場を演出し目も
 あてられ水も有様であつた
 さすがに悪人共も大勢に無勢とても叶はぬとや思ひけんその中の一人端
 屋の土藏裏より田の中に出て長脇差の十字文字左右に振りつゝ大川へ向つ
 て走つたこの者遂に追地のワナバまで落のびて来たところ雇人の馬を引
 りて草洲に出でんとする者に出會つたので友達と喧嘩をなし三里程歩つ
 たのであると言つたが別談耳にもとめず恬淡として居つた處であつたが直
 し追地の忠吉といふ人休みながら刈拂鎌をとりて居つた處であつたが直
 ちにその鎌にて件の悪党松吉をきり殺し翌六月一日は一天からりと晴水
 渡つて空に一稔の雲をもちめぐる快晴であつた水は追地板名大荷澤等
 ことごとく山探しをなし菅沼大栗松阪茸澤等ことごとく知らぬ限もなく
 尋ねまはつたが坂深久保にて浅吉を召取り又大荷澤にて友藏を召捕へ新
 吉は半死の状態であつたが悪党の人数並に姓名等残らず聞き取つた後大
 川へ持出してうち殺した





五先觸の上出で向ひたるものがあったが此は眞の袿谷でなく勇士
 五六人而かも覆面抜身といふ出でたが何れも大兵の若者であつた然
 して彼の者共の申す様この度薩州侯に於かせられたは横濱征伐仕るべ
 き儀なりと軍用金不足につき借用したし旨申入ル首尾よく成就の
 上は吃度返濟仕るべく無心いたしあく者につき金品差出すべきやう殿
 重に申しつけた此は亭主並に眞方千代九兵衛金藏へ業内いたし金子入
 の箱相渡した此は早速持参仕るべく千代一人大越路まで送りといける
 にその者一脇差一本と金子一兩とをさしつかはし粟野にかへるべき旨
 申し付けそ此より千勢に於て出流旅館へ歸つたといふことである
 同夜大柿村龍興寺へ浪士体の者兩人覆面抜刀を持來り我こそは薩藩に
 候、共軍用金製作方役儀承り候條多少に依らず借用仕度由にて即ち往
 待有合せ金五兩倉差出でた此は此を請取り住持千製の濁酒かつまた住
 夜食を相振舞申さんと云つた此れども此を飲食せず早速罷歸つたと
 いふことであるしかし粟野大柿の一條は出流旅館頭分の者は一切存じ
 申さなかつたといふことである
 口手配の農兵繰出しのこと
 附胡散の召取のこと
 さて又重役の下知によつて村方名主役宅にて相談相整へ百姓勢揃へし
 時分又々下知ありて大越路川端まで出張いたすべく旨御觸れがあつた
 ので愈々繰出すことになつた寒氣がきびしいので炭薪木敷ヶ所に焚火
 し今やくと控へたる所へ長髪侍共人召連此夜中宮澤辺にて繰出し
 の人数に出遇へた此は何人なりやと相尋ねたるに眞岡の醫者にて口粟
 野村の彌次兵衛知合なる申した此れどもこの筋柄夜行の人心許なし
 とて所持の荷物を改め見れば赤地錦の陣羽織と五三の桐の紋付きたる
 品などがあつたので胡亂なりとて錦を掛け引据て穿儀したる出流より
 引出した者であつたやありて大越路坂にて粟野の方へ来る二人の侍
 引捕へて繩を掛け穿儀す此は此水また同類なるよし少しの間三人を
 引捕へたが此は戸田家よりの間者といひながらひ取縛方に於て貰ひ
 請けたといふことであるかくて拍子木にて列を揃へ繰出したるは眞先に
 白地に黒く第一番粟といふ字を染め出した大幡一梳押立才領と覺しき
 は抜身の槍を横たへ白木綿に鉢金を包み鉢巻きとして白地にあの字
 の合印を背負大幡に繰り繰出した
 そ此より繰りて鉄砲數百挺槍共數百本此れは即ち口粟野勢一番組
 であつた續いて二番千も同幡へ第一番組と書き才領鉄砲槍同様三番も
 同様四番五番組にいたるまで柏木より約尾まで村勢三番は久野西澤勢
 四番は南摩勢一番三番は中栗野勢皆々同様の幡押立合印同様鉄砲はす
 きまもなく揃つたこの粟野勢と申すは先年中栗野三人内鳴屋に夜盗の
 體の者一宿なしたるを千配いたし或は即殺或は生捕或は草刈鎌にて忠
 告といふもの、千にかへり首かき落さる都合八人召捕つたる強氣の農
 矢であれば一番二番へと押し進みまたも一戦して高名せんと思ひばて





あらいが先年嶋屋千配のせつ味方二人ほど討死と千貞の者少々あつた
 ので幡目印等にいたるまで衆といふ字の幡を用意し番組才領は御締手
 先の者であるといふことである五番組才領は澁谷様御家来のよし夫々
 下知あり十一日夜四つ時分より大越路坂へ入りだし一番二番三番組と
 その勢都合四五百人薪燈火十八ヶ所焚き己前の幡目印を押し立て小
 越路坂へ繰出しは四番五番組の勢都合二三百人炭薪七八ヶ所に焚き
 同幡目印天空にひるがへり闇夜も白晝なるかとあやしむ許りの有様で
 あつた

鍵兼不動
 上二月の上流中に川底が急に直下低落し懸つて瀑布となる所があるこゝ
 を鍵兼不動淵といふ瀑布は幅四米計り高さ同じく二十米位だが中間に折
 りがつかつて二段落ちの形になつて居りその水の直下する正面の岩壁に不
 動尊お在します水けれどもこのお姿を拜せる者は極くまれで急い事の通じ
 た時のみ右手に剣を押し威容厳然として水中にお姿を現すと聞えてお
 る淵は廣さも可なりあつて水枯の折でも四米位の深さはあり瀑音は高く
 谷間にひびき清透で木の葉一つ沈んでおてもすぐわかる明治十九年に大
 早賊で蔬菜水縮枯死の状態になつたとき今から數代前の同町妙見寺の住
 職岩上泰釣和尚が草鞋穿まで登つて行つたこゝから四里半は優にある
 沿道の農家は盛に蔬菜に水をまいておる和尚は威勢よく誰彼にと言葉

さかきけし今倦が雨を貰つて来てやるからと
 聞く者何の降るものかといふ氣味合ひで寧ろ冷笑を以つて迎へた和尚は
 不動淵に到り拜し香を焚き懇ろに不動尊に祈る所であつた心かきかきに期す
 る所あるものゝ如く欣然として下り立ち字中栗野大栗といふ淵より三里
 半手前の處に到るに雨降然として盆を覆じた如く降りしきる而も青天ど
 ろこの土砂降の状態であるから畑に田に手桶の類を持つておる連中啞
 然としておふ所を知らなかつたといふことである
 最近でも早越續きの時は他所村から潜入して來て魚の骨が何かの汚穢物
 を淵に投げておることがあるするとこゝれが流水出るまで雨が降り續き増水
 氾濫の恐れがあると云はれておる

鑿の音栗野で變る
 明宗の初年口栗野字井戸澤といふ山林中萱薄を結んで一年の庵をつくり
 行ひ澄ました老翁があつた里人こゝれを井戸澤法師と呼んだ密教の造詣深
 い人で加之に能筆家であつた村社の幡に同人の揮毫されたのが残つておる
 或る時山を下つて懇意な人を訪れた時に一人虚無僧が流して來た
 余禪の袈裟をかき閑東本山の本式に扮装した立派な風體であつた主人は
 好きな道として午の内を少からずはずんだのであつたとこゝろが虚無僧先生
 更に歌口を濕して劉曉と吹きならすのは至極の難曲と云はる、鶴の巢籠
 の一手である法師驚くかと思ひの外「そんなんこゝはけつで吹くと毒づく虚





傳ひらるゝあり
 即ち或真夏の二と字上五月の畑の除草に汗を流す一人の農夫あり名を彦
 五郎と云ふその時ど二からともなく小僧の近くより来りて水浴びにゆか
 人とす、おるなり然れども彦五郎は笑ひて忙しくおれは水などおびて居
 られずと答へし小僧は尚うるさくつきまとひきらは冷たき水にても飲
 みに行かん」とく早とも自ら先に立ち彦五郎を無理に誘ひ出したり彼は余
 儀なく川に到り將に水をのまんとするや件の小僧俄に彼を水中に引き入
 るにあらざるや涼々と流る、栗野川の氷は再び彦五郎の姿を寫さず唯あ
 らゆる神祕をつ、みて若さかみ石を散らしつ、流水に流れたり
 あはれ彦五郎はかくて真夏の白晝夢よりもはかなく消えて又人の里に見
 る能はざりきこれ全人河童の仕業なりとて人々は此の所を以後彦五郎川
 端と呼び今に至るも魔の淵の如くにおるると云ふ

尚現在亭下五月にあちや淵とよびて巨石水より出で怪若岸にそゝり立つ
 深溪あり之も亦當時の河童の爲にまだ花もはちらう乙女の身をこの淵に
 はかなくせりよりその娘の名おちやをとりにてかくは名付けたりとぞ傳ひ
 らる

かの河童はその後も不動淵を本據として晴天には下流にある遊地平にあ
 らはれその遊地をとりて食むおたりかゝる状態に土地の人のいたく恐水外
 に出るには伏す暇へ下を入水て之を警戒する有様なりきこの暇の石の様

河童小僧のいたづら
 人家全く絶え樹木蒼々として溪水直下断崖に白布を垂らすが如くその下
 底知れざる淵となり人をして自ら膽寒からしむる深淵あり之即ち鎌倉不
 動淵である

今をさるること凡そ百年前この淵に年を経たる河童すまいて往々幼童に身
 を変へ近隣に出没し巧に村人を偽りて川に誘ひ生肝まとりきと云ふ話の
 こと、断崖の當れるや否やは分らぬがこの館屋のことは最として真夏のこ
 のことである

無僧たるもの烈火の如く憤り身共とて武士の果てさあ吹けけつて吹けと
 つのよるその權幕の恐しき主人は縮みあがつた法師荒爾として尺八も
 ごとるなりこれを逆しまにして鶴の樂籠り想夫戀の一節を吹く音律の高
 底抑揚幽寂の妙音嫺々として梁の塵を舞ひ池の魚も浮び出づるの妙手
 おつた息のつまるほど驚いたのは虚無僧先生尺八を奪ふが如く取るが早
 いが逃出したとは今も生残りの故老の間に交換さるる笑話である縣内の
 成田行者の中にも尺不動經位法螺貝で吹きならす者もありと聞く
 以上の押話は附焼双だが話は元の本筋にもどる館屋の曰くどうも栗野の
 入口で笛を吹くと笛の音が変る栗野を中心として附近村落の山嶽に種類
 はわかれぬど金属の鑛脈があるに相違ない音調の変化はこ水がためであ
 ること





とき起つたといふ
 本元口栗野字ミタラシに堂宇あり中に間廬を祭る世人は水を間廬堂と呼
 小往昔前畑地なり農夫農繁期の暮る、を知らず働き居るとき間廬
 大聲を發し「いかにいかに」といふ
 すると農夫如何なる仕事をもとりやめ家路につくといふその聲は
 居るためか今に至るも日暮まで働き居る農夫を見ず
 久保田堀は今の貴族院議員久保田讓氏が明治の初め日光縣屬令ありし
 時村民の利便をはかり開掘せしものと云ふ

名所
 賀蘇山神社
 祭神
 武甕槌命 月讀命 天御中主命
 本社寛永十一年祝融の災に罹り越えて寶曆二年復々災厄の見舞ふ所とな
 り堂宇ごとく焼失して歸したり文政二年三度祝融に災せられし後、以
 つて旧記多く焼失してその事創を知るに由なし

三代實録に
 陽成天皇元慶二年九月十六日勅下野國賀蘇山神社五位下云々
 されば今日より元慶二年迄算す小ば千三十七年の昔にありそよ、當社

口碑傳説
 本往時栗野城ありし頃は今の口栗野字仲町辺は所謂榻子にして横町方
 面は大平なり現に市街の形をなせる口栗野は當時廓内にて僅かに諸
 將諸役人の家宅ありしのみにて至つて寂寥なりま、此に反して岡崎の
 本原落内一帯の地は所謂宿場の形を備い人家も又多く且つ當時廓内と
 交通なかりしため字山王前より登場に通ずるの大路ありて申々繁華
 にてありき
 口今の口栗野神社は天正十四年中現往横町落合氏の祖落合徳雲入道の創
 立なりといふ
 八今より數百年の昔神山某なる者伊勢參宮の歸途麻裡を得て試みに宇岡
 なる畑にまきしに土質の適せるにやすこふる良好なりけり水は人々に
 命を與へいよ、繁殖するに至りぬこ水岡地麻の起原なりといふ
 二栗野城主平野久國賀蘇山神社參拜の留守を落合徳雲入道皆川廣照につ
 ぐ廣照齋藤秀隆をつかはしてこ水を攻む秀隆久國の歸途を要して久國
 の軍を撃破すこの故事によりて戦場の地名生ず追地坂名の地名もこの

を見て河童小僧のいひけるは「こ水こそ石がつな山としてそぼによりつかず
 こ水より河童は何時ともなくこの土地より姿をかくし又人をもなやますこ
 と絶えてなくなりけりといふ





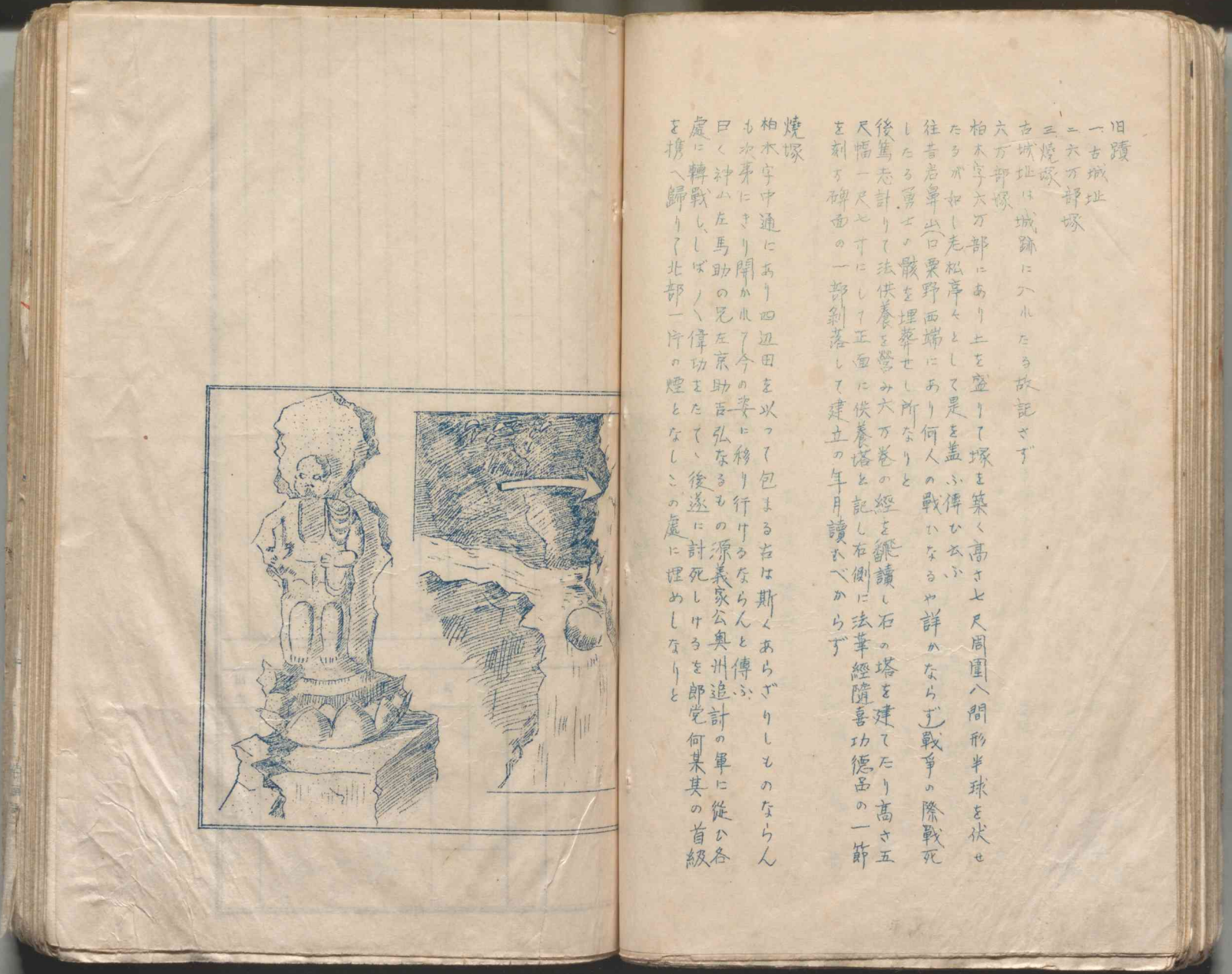
一帯は地は古く須蘇尾と総稱し總鎮護神として尊崇したりしに中頃此賀
 蘇尾と二分したり後何時なりけん北賀蘇尾の地は都賀郡栗野村と改稱し
 南賀蘇尾は粕尾村と稱し安蘇郡に屬せしめたり而して賀蘇尾と呼びし起
 源を繹するに社殿の建てる山内の奥に宇劍の峯といふ所ありそこ二つ
 の巨巖あり賀の石蘇の石と稱する頗る怪奇なり俗に注連懸石とも呼べり
 その次第は伊勢國二見ヶ浦なる注連懸岩に彷彿せるを以てなり賀蘇の
 字この一石の名にと水り春風秋雨三百年運禱として祭祀懈りなかりしも
 保元平治の頃に至り天下麻の如く乱れ世は修羅の巷と化したる餘波をう
 けて本社もほとんど荒廢に委したりしが小野朝臣道綱といふ者都賀郡上
 河原田村に住せしが之を聞きて慨しく思ひ伏見帝正應二年里人を誘ふて
 登山し近郷の篤志者より金穀の寄附を求め自己の出資を併せて大いに修
 繕を加へしかばや、旧觀に復するを得たり
 爾後三百餘年間風餐雨食に遭ひたれば慶長二年六月時の領主結城中納言
 秀康郷再建せり
 當社は實に氏子を有すること千二百に達し靈驗殊に赫灼たるを以て四
 時参拜者跡をたつことなし
 境内に嚴島神社山神社宇奈提神社稻荷神社等の諸社あり
 昭和二年堂宇破損せるにより修繕せり
 現今は往時より盛ならざるも尚参拜者少からず
 祭日は一月三百九月八日九月二十三日十一月二十三日にしし殊に九月二

十三日の郷社祭に於ては縣より知事代理の例幣使來り嚴かに祭典行はる
 當日は獅子舞及び代々御神樂等ありて近郷よりの参拜者多し
 前九月十日より尾鑿山奥の院の御山開きをなし十一日より十九日まで隔
 日各郷より参拜者交代し参り例祭を行ふ

栗野にあり沿革中諸等につきては城跡史跡等に於て述べたる故のきね
 て記す
 横尾家所有たりしが横尾家没落後所有となり公園となす殊に一、どの
 名所として知らる
 風景絶佳一望千里吹き來る風も感嘆詩を詠じ去る
 梅林に道真の人格境遇を思はせ春風あると祈り史家の脳裡にも
 いっしの春のよめきに國花の美麗を咏嘆せざるを得なん境地に走らす
 てあらう

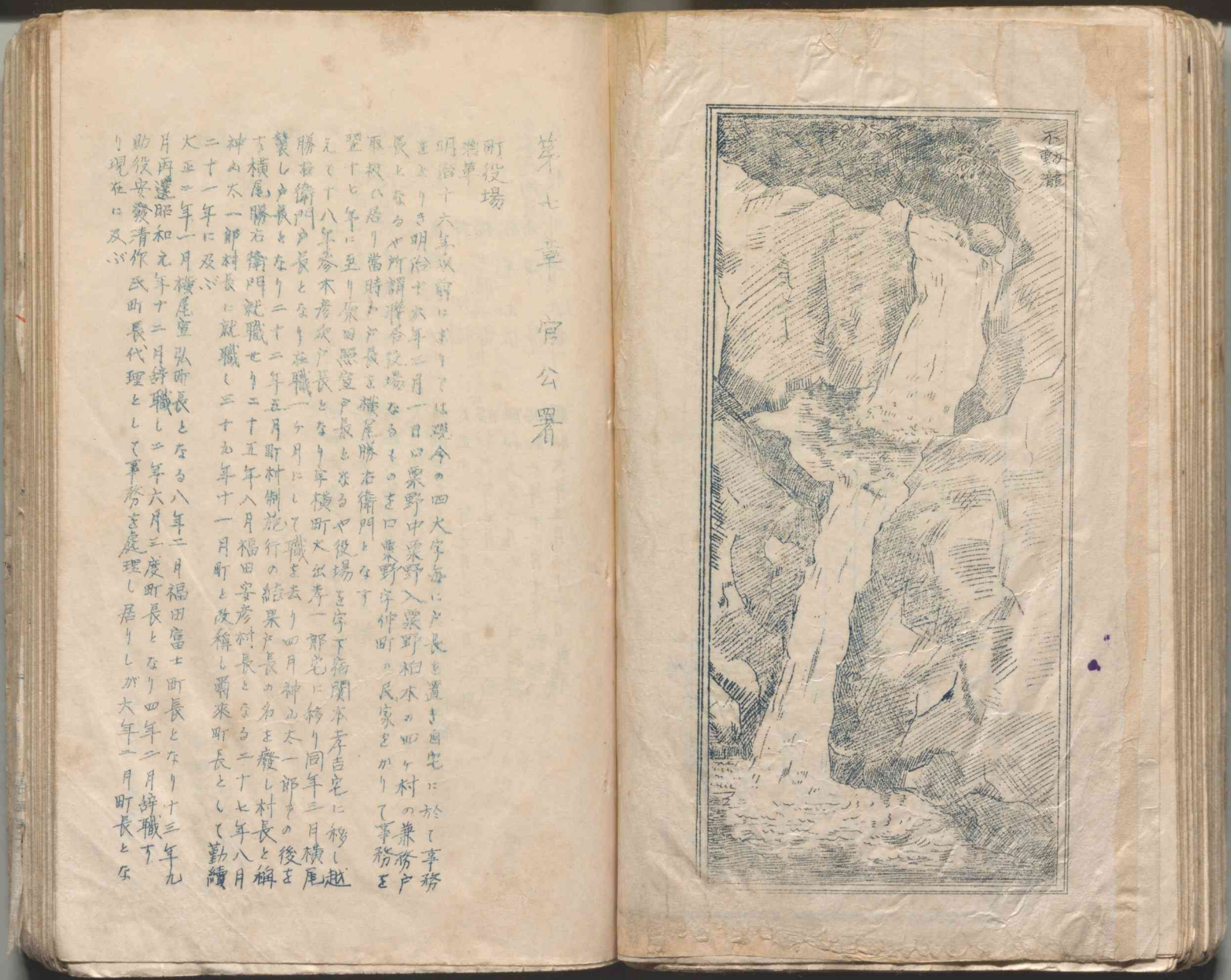
粟野の大和心を人とはは
 朝日に香い山櫻花
 ついで赤紫の毛壇金山をつゝ、五三郎ちつ、じである
 この時各方面よりの見物者そのあたまをたつことなし





旧蹟
 一古城址
 二六万部塚
 三燒塚
 古城址は城跡にハルたう故記さず
 六万部塚
 柏木宇六万部にあり土を盛りて塚を築く高七尺周圍八間形半球を伏せ
 たうホカし走松亭々として是を蓋ふ傳ひ云ふ
 往昔若草出口栗野西端にあり何人の戦ひなるや詳かならず戰爭の際戦死
 したる勇士の骸を埋葬せし所なりと
 後篤志計りて法供養を營み六万巻の經を誦讀し石の塔を建てたり高さ五
 尺幅一尺七寸にして正面に供養塔と記し右側に法華經隨喜功德品の一節
 を刻す碑面の一部剝落して建立の年月讀むべからず
 燒塚
 柏木宇中通にあり四辺田を以つて包まる若は斯くあらざりしものならん
 も次第にきり開かれ今の姿に移り行けるならんと傳ふ
 曰く神ハ左馬助の兄左京助吉弘なるもの源義家公奥州追討の軍に従ひ各
 處に轉戦ししばしば偉功をたて、後遂に討死しけるを郎党何某其の首級
 を携へ歸りて北部一帯の煙となしこの處に埋めしなりと





第七章 官公署

町役場
明治十六年以前は、
長となるや所謂
取扱ハ居リ當時
元十八年参木
勝衛門戸長とな
横尾勝右衛門就
神山太郎村長に
大正二年一月
片再選昭和元
助役安發清作氏
！現在に及ぶ



536 栗野地区 栗野町収集文書

ア1





沿車
 明治四十一年七月一日創立し以來十人。巡查部長交代し現在に於ては富
 田幸吉氏巡查部長就任事務をとる
 組織
 當派出所は一町四ヶ村(粟野南摩清洲粕尾永野)の巡查を警察署長権限委任
 のもとに監督す
 又警察署長の名に於て人民の行政處分願出許可保安等凡て委任されたる
 るものである
 位置
 口粟野横町にあり役場に隣接す
 沿革
 口粟野駐在所
 昭和三十七年二月三日口粟野上町に創立し以來二十三人の巡查交代す
 昭和七年三月口粟野下町に新築移轉室井巡查と交代して狩野巡查就任事
 務をとる
 組織
 當駐在所は鹿沼警察署を本署とし口粟野に巡查部長出張所を置き、水が
 監督のもとにあり

組織
 町長 一 名譽有給
 助役 二
 収入役 一
 書記 四
 現狀
 所長 安發 清作 昭和六年一月二十七日就職
 助役 谷津嘉一郎 昭和六年三月六日就職
 助役 谷中長一郎 昭和六年三月六日就職
 収入役 谷津行三 大正十四年五月一日就職
 書記 廣瀬長一郎 明治四十五年一月二十二日就職
 神田知樹 大正十二年九月三十日就職
 福田勝一郎 昭和六年三月三十一日就職
 松尾元保 昭和六年三月三十一日就職
 農會技術員 澤三郎 昭和二年十二月十日就職
 小使 川津三郎 昭和六年五月三十一日就職





入粟野駐在所
沿革
當駐在所は明治三十八年六月七日落合金作氏巡查として就任以來十九人の
の巡查交代し現在に於ては昭和六年十二月小林巡查就任事務をとる

郵便局
沿革
明治七年十二月十日粟野三等郵便局として開始す
當時は郵便集配事務のみ
明治八年十月一日貯金事務開始
明治二十三年四月一日為替事務開始
明治二十九年十一月十六日小包事務取扱いは開始す
明治四十一年二月二十一日電信事務開始
大正元年十二月二十六日電話通話事務開始
大正十年十二月二十一日特設電話開始
未郵便局は明治七年開局三十四年九月改築大正九年四月再改築
開局と共に福田敬二氏局長を拝命す
明治二十年十一月二十一日福田七右衛門氏局長となる
明治三十八年二月十九日福田善右衛門と改名

大正三年十一月十三日善右衛門氏死亡す爲に空子半七郎氏局長心得とし
て事務を司る
同年十一月十七日福田七右衛門氏局長拝命
大正十二年七月二十六日家督相續により七右衛門と改名すしかして今日
に至る
組織
三等郵便局
現狀
遞送
鹿沼粟野間 二回
粟野粕尾間 一回
集配事務
市内市外の二部に分たる
集配
町村
一町三ヶ村粟野町清洲村南摩村真名子村
之を大区に分つ
郵便出張
十七ヶ所
電報配達區
粟野町南摩村清洲村粕尾村永野村





第八章 銀行

銀行
鹿沼興業銀行栗野支店

沿革

明治二十二年栗野銀行創立す資本金十万円なり
横尾勝右衛門神山太一郎諸氏の盡力による

明治四十年資本金五十万円に増額す
大正十二年三月五日加蘇銀行と合併して加蘇銀行栗野支店と稱す資本金
百五十万円なり

昭和三年四月一日加蘇銀行と鹿沼興業銀行と改名すると共に鹿沼興業銀
行栗野支店となる

経済不況の結果減資し現在は資本金百二十万円なり

組織

株式會社

支店長 石川岩四郎

書記 一三名

小使 一名

全記所

明治二十年宇都宮區裁判所栗野出張所開設
大正二年七月十五日宇都宮區裁判所栗野出張所と改名
大正八年七月一日栃木區裁判所栗野出張所と改名
最切之を判事取扱ひしを裁判所構成法の改正により裁判所書記之を取

現狀 一
雇員 一
松尾 大門勝之進 正





昭和六年度調

線香粉原料工場
 戸数 三戸
 従業男三名
 生産額 七五〇〇貫
 價格 九〇〇円

備考 工場とけい個人所有の小規模のものなり

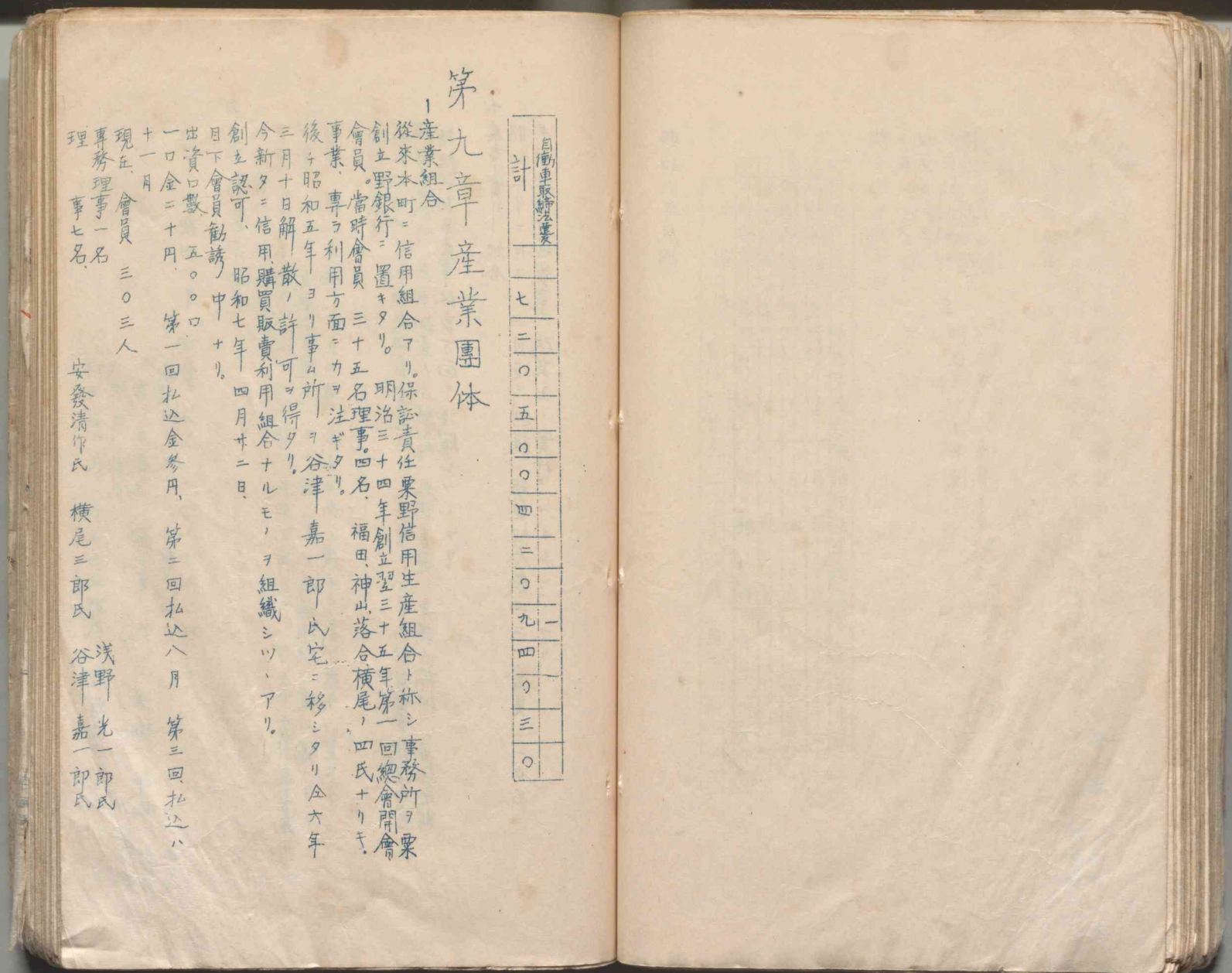
工場名	資材消費量	製品種類	数量	備考
福田製材工場	針葉樹	板	四一〇	二五〇
齋藤製材工場	闊葉樹	板	一〇二	二五〇
大串製材工場	針葉樹	角材	一七二	二〇〇
栗野製材工場	針葉樹	板	一八〇	二〇〇

金融状況
 昭和五年下野中央銀行休業の餘波をうけて人心極度に不安を感ぜざる引
 出すもの甚だ多かりしが今日に於ては信用價值高からず不安定も漸次復
 増額の傾向にあり

工場
 福田製材工場 大正十三年三月十日創立
 齋藤製材工場 明治三十七年創立
 大串製材所 不明
 栗野製材工場 不明

工場名	所動力種類	機械種類	車輪數	職工數	馬力數
福田製材工場	電力	丸鋸	一台	三人	一五
齋藤製材工場	水力	丸鋸	二台	三人	七及五
大串製材所	水力	丸鋸	一台	三人	六
栗野製材工場	水力	丸鋸	一台	三人	五





第九章 産業団体

1 産業組合

從來本町ニ信用組合アリ。保証責任栗野信用生産組合ト称シ事務所ヲ栗
 創立野銀行ニ置キタリ。明治三十四年創立翌三十五年第一回總會開會
 會員當時會員三十五名理事四名。福田、神山、落合、横尾、四氏ナリキ
 事業。専ラ利用方面ニカマ注ギタリ。
 後ニ昭和五年ヨリ事務所ヲ谷津嘉一郎氏宅ニ移シタリ。六年
 三月十日解散ノ許可ヲ得タリ。
 今新タニ信用購買販賣利用組合ナルモノヲ組織シツ、アリ。
 創立認可、昭和七年四月廿二日。
 目下會員勧誘中ナリ。
 出資口數 五〇〇口
 一口金二十円。第一回払込金参月、第二回払込八月、第三回払込ハ
 十一月
 現在會員 三〇三人
 専務理事一名 安發清作氏
 理事七名 横尾三郎氏 谷津嘉一郎氏 浅野光一郎氏

自動車取締法違反
計
七
二
〇
五
〇
〇
四
二
〇
九
一
四
〇
三
〇





第十章 産業

1 農業

(1) 地理的特殊作物

A 大六

此、山間僻地ニ然モ交通路ノ如キモ今日ノ如ク整美發達セザリシ時
代ニハ搬出ニ便利ナ特作物ヲ選ブハ理ニ於テ當然ナルガ如ク、
何ナル特作物ヲ選ブヘキカニ付、吾々先祖ガ如何ニ苦心シタ
カハ想像ニ難クナシ、又永イ開拓ノ土開拓ノ先祖ガ如何ニ苦心シタ
事ニ對シ敬意ヲ表サネバナラズト、今時ニ於テ如何ニ發展セシム
ベキカハ吾々が大イニ考ヘネバナラズ。

大六作ノ栽培起原ハ甚ダ古ク或ハ弘治年ノ間栗野村太字岡ニ栽培セ
シニ其ノ成績甚ダ良好ニシテ今日ノ岡地ノ声價ヲ擧ゲシト云ハ或
ハ東大栗村引田ニ栽培セシト云ヘ何レニシテモ上都賀部ノ最モ早キ
フトハ百ムハカヲヤル事實アリマス。其ノ後ニ都賀下都賀河ノ内
安蘇ノ四郡ニ栽培サレ一時甚ダ盛ナリシモ最近競争作物ノ出現ハ
莫ク新作ニ大麻程勞力ヲ要セズ、芋麻ハ生産費低廉ニシカモ用途廣ク
及ビ縣外産地ノ増加等ニ依リ或ハ害虫ノ発生ニヨリ局部ノ用途廣ク
ヲ蒙リシ等ニ依リ以前ノ如ク盛ナラズ、最近製ノヨリ煮剥ノ方經濟的
ク生産費少ナク又水田ノ裏作トシテ有利ナルヲ増加ノ傾向アリ、多
ク豊、經系トシテ廢區岩岡山縣石川ノ諸縣ニ移出シ其ノ他ハ細茶、

2 栗野町農會
創立明治卅三年四月現在會員六ニ七事業トシテ品評會農事講話會並ニ
講習會試作 産業調査及統計 思想善舉 争議、調停 自給肥料ノ
増殖奨励等農事改良方面ニ活躍シツ、アリ。

3 農事實行組合
昭和三年二月ヨリ四月迄ニ創設 現在組合數四ニ 會員三一〇名
共同採種其他農事 改良上、實行 ヲナシツ、アリ。

4 栗野蔬菜出荷組合
組合長福田源一郎氏。
事業蔬菜類及特作物ノ種子等、共同出荷ヲナシツ、アリ。結縁自菜出
荷量ニ三〇〇貫鹿沼市場ヘ。大六種子一ニ石島根縣ノ椛山驛ヨリ
里芋、鹿沼市場ヘ七五〇貫。創立日尚ホ浅キニ斯ノ盛況ヲ呈セリ。

5 常任幹事
福田富士氏 大牧谷次郎氏 齋藤光次郎氏
浅野光一郎氏
小曾戸兼吉氏 郡司義一氏 川津祐一郎氏
高橋孝之氏 中枝武氏

6 幹事ノ任期四年 總會ハ毎年一回一月ニ行フ。





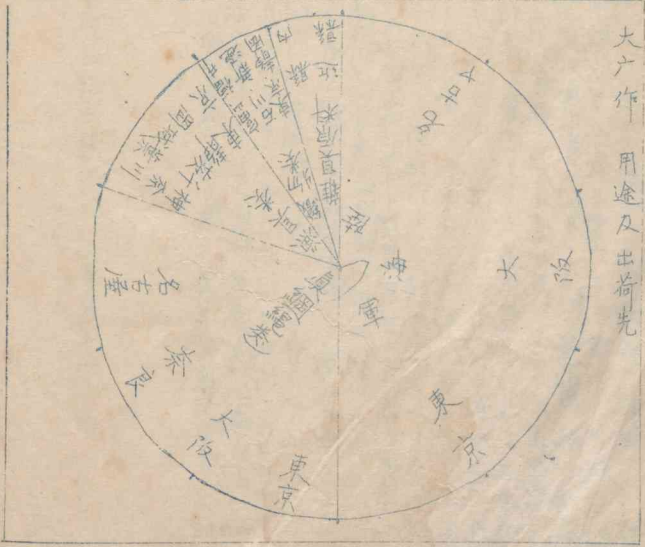
耕作方法
 指シモノニ旧套ヲ墨守スル農民モ治々ト寄セ來ル時代、變遷ト敵多ク、トニヨツテ耕作ノ方法モ著シク進歩、發展セリ、即チ水稻栽培ノ如キハ最近甚ダシク研究的ニナレリ、即チ整條植ニシ一坪ノ株數ノ研究ヲナス

字	名	耕作面積
口栗野	一三町二反二畝四歩	
中栗野	二七町二反八畝十九歩	
入栗野	一七町一反	
柏	八町二反	

栽培起原不明ナレド古老、伝フル所ニヨレバ約二百年以前ナリト云フ然レドモ當時製粉ノ方法及販賣方面栽培技術等發達セガリシタメ著シク發展ヲ見ズ僅カニ自家用トシテ今日ニ及ベルモノ、如シ
 適地栽培地ノ選擇ヲ選ビ栽培技術ニカク注ギ且ツ製粉亦カ利用ニシテ方法ノ修得販賣統制等ニ研究ヲ重メレバ將來有利ナルモノナラン
 中栗野ノ及ビ入栗野ニ多ク栽培ヲ見ル農會ノ獎勵ニヨリ益々發展シヨリ、作付反別約一畝反、收量二四〇〇ム、昭和六年價格六〇〇円
 自家用トシテ消費スルタメ收量不明ナルモ大畧ヲ示セリ
 口水田ノ面積

用トシテ近縣ニ移出ス。要スルニ大ニ作ハ永キ工場有リ地理的ニ恵マレタ本町ノ特産タルガ故ニ大イニ是レガ發展ノ策ナネバトラズ即チ販賣統制ニ一大革新ヲ與テルカ生産ニ勝ルカ省キ得ル機械ヲ見付ケルカ或ハ原料品ニテ出荷セズ本町ヲシテ第二次の生産ヲナシ得ル何等カノ設備ヲナサレバ大ニ作ノ前途ハ甚ダ寒心ニ耐ヘサル状態ニアリ。

試ニ作付反別ノ字別ニ示セバ
 字 名 作付反別
 口栗野 三 町 四 反
 中栗野 二 町 〇 反
 入栗野 一 町 三 反
 全收量一五四八〇ム
 價格四八二六六円(昭和五年)





トウ或ハ一株一本數ノ研究ヲナストカ或ハ施肥量或ハ施肥期ニ注意ヲ
 松フトカ多收穫ノ研究或ハ機械カヲ利用シ勞力ヲ節省シ餘剩勞力ヲ副業
 方面ニ向ケルトカ又麥作栽培ニ於テモ香川式廣蒔ヲナシ或ハ坊田式
 ヲ試シニ條蒔ヲ試シ或ハ點播條播ノ何レモ最適カ播種期ノ研究及
 連作ニ
 合理的耕作法ヲ採ラントシツ、アルゴトハ爭ハレ又事實ナル。只
 ラカハ耕作上ノ共同化共存同榮ノ精神ヲ欠除ナラセ反ス。モ遺憾
 地主對小作人關係
 農家戸數四四戸中自作農僅カニ二九八戸ニ過ガズ地ハ皆小作者及自
 作兼小作者ニシテ地主ト小作人トノ關係ハ極メテ複雑セリ小作料ノ如
 キモ反當リ三俵ヨリ四俵ノ間ニアリテ一定セズ如作モ一定セズ。
 而シテ小作料ノ如キモ年々豐凶ニヨリ地主對小作人間ニ多少ノ折
 衝アリト一時ノモノニシテ永久性ノモノニ非ズ。思想的ニ惡化シ
 モ、ニ非ズ從ツテハエル多識ト見込ス程ニ非ズシテ概シカ円満ナ
 農具ノ変更若ルニシキモノヲ舉ゲレハ
 現時使用セシモノ
 大戸作播種ニ
 往時使用セシモノ

中枝式(本町篤農家中枝武雄氏ノ
 發明ニガ、ルモノニシテ農家ガ
 此ノ播種器ニヨリ受クル恩惠計
 リ知レズ) 因ニ中枝武雄氏令ハ
 故人ナリ
 2馬鋤
 齒、付キ方ニ改良ナ
 3 脱穀機
 足踏
 4 新起器
 馬鋤
 鐵野式

水動カカカ
 右右右
 用用用

明治中世近手播ナリ
 仕事ノ能率アガラズ種子ノ下リ方ニ
 厚薄アリ
 一重馬鋤ニシテ齒、付キ方ニ工夫ナ
 金ゴキ
 麥打器 } 何レモ原始的
 唐鐵極メテ原始的ニシテ功程少ナレ
 大鐵.....(深耕困難) 反動少ナシ





養蚕
 本町、養蚕八年ニヨリ消長アリ飼育法ノ如キモ未ダ改良ノ余地アリ
 本町ノ山間部ハ穀蔬蔬菜ノ如キハ全然自家用ノ域ヲ脱セズ林産モ亦思
 ハシカラズ交通不便ノ覚達滿鮮ノ地方ノ開墾ト相俟ツテ用材價格ニ大
 影響ヲ及ボシ本町林業ニ一ト大変化ヲ來サシカ。此ノ点ヨリ見レバ本町林
 山間部ハ是レヲ養蚕地トスルヨリ途ナシ。然レドモ森林ヲシテ水源涵養
 其ノ他間接ノ効用ヨリ論ズルハ自ラ別ナリ。

農村ノ機械化即チ大機械ニ非ザルモ水カ蓄カ人カ等ニヨル機械化ハ
 仕事ノ功程ヲ大ナラシメテ生産費ノ低減ヲ計リ農村更生ニ必要ナルベカ
 ラナルモイデアルノノ支遣ノ跡ヲ見ルニ何レモ小農組織ニ最適ナルモ
 一ナリ。

6. 田打車
 每形ヨリ功程大
 7. 網ジヨレン。

振馬鐵
 使用簡便ニシテ價格低廉
 仕事ノ功程甚ダ大

本町ノ桑園面積ヲ示セバ次ノ如シ。

面積	口栗野	中栗野	入栗野
作付面積	七丁歩	十二丁歩	十七丁五反歩
種別	口栗野	中栗野	入栗野
春蚕	一七二	七二四	一九九〇
夏蚕	三〇	五〇	三六九
晚蚕	四六	三六三	四六七
計	二四七	一一三七	二八二六

多クハ根刈仕立ニシテ堆肥ヲ多量ニ敷キ込シ山間部ニ入ルニ從ツテ草
 堆肥ヲ多ク敷キ込シ手入レモ稍々完全ニ行ハレ居レド山間ノ山麓ニハ
 未ダ木立仕立ノモノヲ見受ケ急激ニ改良ノ法ナシ本町農會ガ桑園改良
 工カヲ注キツ、アレバ速カラズ改良サレン。

口籾、昭和六年年度産額

山間部最モ多キハ地理的ニ耕種農業ニ不適當ナルタメナリ。

ハ飼育法別
 A. 撒土券
 B. 普通券

七割ハ安ノ方法ニヨル





3 牧畜業
 本町ノ農家戸數及び消費地トノ關係上今後益々發展セシメホナラヌ
 爲メ本町ニ於ケル雞數ヲ調アレバ

飼養戸數	十羽未満	十以上以上	五十羽以上	百羽以上	計
一八七戸	一一二	六一	二	二	一八七戸

飼養羽數ヲ調アレバ

雌	雄	計	雞	合計	一日ノ産卵數
一〇二〇	二一一	一三三二	一〇四四	二二七五	四八一

是レヲ要スルニ本町ノ養雞ハ十羽未満ノ過少飼養家ガ多數ヲ占メ從
 ツテ其ノ飼養ノ方法モ眞劍味ヲ欠クモレニ反シ多數飼養スル時ハ其ノ
 方法ニ於テ其ノ精神ニ於テ眞劍味ヲ帶ゴトハ必然ナリ且ツ普通農家
 ハヨリ以テ飼養能力アルト恩ハル
 然レドモ只後ラニ過量飼養シ專業化スルヲ強ウルモノニ非ズ即チ農家
 ハ副業ノ範圍ヲ脱スルヤカラズシテ眞劍味ヲ欲ス産卵率モ〇四七ニシ
 テ明ラカニ飼養上ノ欠陥ヲ意味スルモノナリ
 販賣卵ノ如キモ各家區々ニシテ何等ノ統制ナキモ近時農會才ノ活動ニ

二 機業地トノ關係
 販賣額 四千二百十貫ニシテ
 自家用トシテ消費ナル、類ハ扇位、程度
 製絲トシテ消費ナル、ハ僅少ナリ
 而シテ出荷ハ

最近ノ市價ハ落シ從來ノ經營様式ニテハ到底收支相償ハズ何等カ
 村策ヲ考 究セザルベカラズ即チ桑園ノ改良ヲ計リ桑ノ品種改良
 ヲテシ或ハ飼養法ノ改善病蚕ノ取扱ニ注意シ或ハ販賣 統制等ニ最善
 ヲ爲シ或ハ經營様式ニ大改革ヲヨサハルベカラズ

古河 結城 小山 下仁田 確氷 社
 甘樂 社

掃日及上箕日

種別	春	夏	秋	冬
種別	蚕	蚕	蚕	蚕
掃日	五月七日	七月十五日	八月十五日	九月十七日
上箕日	六月七日	八月十五日	九月十七日	

三割





A 本町用材産出量 九〇〇石
 製材ハ入栗野山間部ニ行ハル、ト口栗野ニ搬出セラレテヨリ後行ハ

沼ノ地ニ於テ製材搬出セラレ、状態ナリキ。
 本町ニ於ケル山林面積ハ一ニ九一町ニ反ニシテ一戸當リ平均ニ町九反
 一畝弱ニシテ樹種ハ分布ハ口栗野中栗野ニ潤葉樹林多ク入栗野及口積
 根山ニ巨リ用材多シ是レ農耕ノ関係カ、横根山一帯、植林ハ本町が近
 テク起エスル道路ノ改善ト相俟ツテ益々發展シ且ツ意義ハケラレルモノ
 テアル。即チ本町ニテ植林セル横根一帯、用材ハ既ニ伐採ノ期ニ入ッテ
 本町ノ地ニ於テ製材搬出セラレ、状態ナリキ。

林業

現	昭和	昭和	昭和
五	四	三	二
九	六	四	二
〇	一	四	四

ニモ研究ヲ要スルモノトシ本校ニ於テモ特ニリ、点ニ考意シツ、生徒
 ニ實習セシマツ、アリ。因ニ最近、増加ラホセバ次表ノ如シ。

本町ニ於ケル飼育状況
 從來ハ品種等顧慮セス特殊、農家及ビ豆腐屋或ハ料理店庖厨ノ残滓、
 多ク出来ル特殊ノ家ニテ飼育アリシガ近時農會ノ奨励ニヨリ或ハ
 養豚組合ノ設立ヲ見、急激ニ増加セリ。將來ハ品種ヲ統一シ且ツ飼育上
 現ニ減少ノ傾向アリ、
 現在本町内ニ飼育サル、馬、頭數 二 三 八 頭

ヨリ着々理想ニ進ミツアルハヨロコバシキコトナリ、
 品種ノ如キモ雜種ハ多數ヲ占メ居レド農會等ノ力ニヨリ漸ク白上ク其
 ノ數ヲ増シツ、アルハ善ブヤキコトナリ。
 B 乳牛三頭
 品種ホルスタイプ。乳牛トシテ飼育セルモノ三頭一日、泌乳量四升、本町
 内、需要ヲ満シ兩摩村清砂村及ビ粕尾村等ニ移出ス。他町村ヨリ、移入
 ナシ。本町内ノ牛ノ頭數七

